

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720191

研究課題名(和文) 意味的優勢素とその言語相対的処理をめぐる日露対照研究

研究課題名(英文) Comparative studies of Russian and Japanese - linguistic encoding of the language-specific semantic dominants

研究代表者

金子 百合子 (KANEKO, Yuriko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：80527135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア語の意味的優勢素「限界」と日本語の意味的優勢素「安定性」が対照言語間でどのように言語的に処理されているかを、文学作品とその翻訳からなる並行テキストを資料に検討した。複合的事態に対して、ロシア語では連続する個別出来事が動的に記述され、日本語では従属節等で補われた安定的位相が静的に記述される傾向がある。また、動作主による目的志向動作はロシア語に顕著であるが、日本語では語り手による主観的な事実判断の表現が頻出するという特徴がある。語りにおける時制交替では現在時制がロシア語よりも日本語で多用され、上述の特徴が同様に観察された。

研究成果の概要(英文)：This research aims to reveal how Russian and Japanese languages linguistically encode each other's language-specific semantic dominants - the idea of "limit" in Russian and of "stability" in Japanese. Analyzing the parallel texts from literature and translations, I have observed that a complex situation tends to be expressed in Russian as a dynamic sequence of the discrete events, while in Japanese as a stative description of a stable phase (state/process) with subordinating complement, and that the agent's goal-oriented action appears more frequently in Russian than in Japanese, but the latter often add the narrator's subjective emphatic assertion to the situation described.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ロシア語 日本語 アスペクト テンス 言語的世界像 対照言語学

1 . 研究開始当初の背景

本研究は主にアスペクトの機能意味分野に焦点をあてるロシア語と日本語の対照言語研究である。本研究に至る背景は以下の通り。

(1) 言語相対的な意味的優勢素の仮説

各個別言語にはそれが表現を得意とする意味・概念分野があり、それは全体を貫く体系性を持って“当該言語らしさ”を反映する。そのような意味・概念をヴィエジビツカは、当該の言語文化全体を通して入念に工夫されている「基盤的観念 fundamental ideas」と呼び、同様の概念をパドゥチェヴァは「意味的優勢素 semantic dominants」と呼んだ(パドゥチェヴァ「ロシア語の言語的世界像における意味的優勢素としての不定性」(1996))。そしてこの意味的優勢素こそ各個別言語の言語的世界像を特徴づけているものと考えられる。言語の人間(民族)的解釈を唱えたフンボルトの言語哲学「言語的世界像」はポテブニャ等を通して古くから広くスラヴ言語学に浸透していたが、80年代以降の認知言語学の理論的発展や概念/意味分析のアプローチ法の発展と結びつき、再び今日スラヴ圏の研究者の関心を集めている(セレブレニニコフ編『言語における人間の要因の役割 言語と世界像』(1988)、ウリソン『言語的世界像研究の諸問題』(2003)、シュメリヨフ他『ロシア語言語的世界像のキーアイデア』(2005)、ルイロフ『言語的世界像の諸側面』(2006)、プロフ『現代ロシアの言語的世界像の形成』(2008)等)。

(2) 言語的世界像の研究対象の広がり

言語的世界像の研究対象は語彙やイデオムであることが多く、アスペクトの意味範疇に代表されるような「動的事象の推移」が研究対象になることは少ない。しかし世界像が反映される範囲は語彙のみならず、語形態要素、語形成要素、統語構造等を含む「あらゆる語」であると考えられている(カラウロフ『一般とロシアのイデオグラフィ』(1976)、アプレシャン『言語的世界像と体系的辞書学』(2006))。ロシア語では、例えば「不定性」の意味概念がその多様な言語レベルにおいて極めて綿密に構成されていることが指摘されている(ヴィエジビツカ、アルチューノヴァ、パドゥチェヴァ、ザリズニャック・レヴォンチナ)。動的事象の推移に関しては、既にペトルーヒナが「限界/境界」の概念をロシア語のアスペクト体系における意味的優勢素として提示している(「ロシア語の言語的世界像の優勢的特徴」(1993))。その際、ペトルーヒナは主に西スラヴ諸語とロシア語を対照させ、ロシア語における当概念の優位性を述べた。

(3) 従来のアスペクト対照研究

時間軸上での動的事象の存在様式(変化の仕方)と、その言語上での記述のし方を扱うアスペクト論は、スラヴ諸語を土台に理論的、方法論的に発展してきた。これまでのアスペクト研究、とりわけその対照言語学的もしくは類型論的アプローチでは、問題となる言語外現実の同一性およびその一義的な解釈を前提に、その対照言語間のアスペクト的表現の差異を論じたものが多かった(『アスペクトセミナー論集』(1997)、『アスペクト類型論』(1998))。しかし研究の当初から、その理論的枠組みや陳述詞分類、そこに用いられる意味特徴がスラヴ諸語や英語等の主要西欧諸言語の影響を受けていることが批判されており、例えばモーレラトス是有名なヴェンドラーによる英語の動詞分類が(英語に特徴的な)人間主体性のコンテキストにおける分類であり、主題としてよりニュートラルな存在論的三分法に比べ論理的に偏っていると指摘した。ここ20年は特に非印欧諸語のデータをアスペクト類型論に反映させる動きが盛んである(ヨハンソン「キプチャク系チュルク諸語におけるアスペクトと動作様式に関する類型論的ノート」(1996)、プロイ「語彙・時制・アスペクト意味の相関性」(1994))。その結果、興味深いことに、アスペクト現象の記述はこれまでの「活動」や「行為」といった人間本位の分類ではなく、「状態」や「過程」を指標としてなされる傾向にあり、また、同じ言語外現実を描写するからといって、各言語で用いられる言語表現が同じものを意味しているとは言えないという重要な指摘がなされている(ヨハンソン(1996)による「疑似パーフェクト性」の議論、タテヴォソフ「動作様式のパラメタ」(2002))。これまでも諸言語の表現様式の傾向として印欧諸語が人間本位で日本語は自然本位だという指摘(佐久間鼎)、英語の「スル」と日本語の「ナル」(池上嘉彦)といった議論はなされており、動的事象の推移を表現するアスペクト論の中で言語的世界像を論じることが可能になった。

上述の背景のもと、報告者はこれまで一貫して、ロシア語の動的事象の推移の解釈と記述にみられる「限界」への指向性を明らかにしようとしてきた。特に、非限界的な“延びた側面”、すなわち安定的側面を優勢的視座に取る日本語と対照させることによって、ロシア語における「限界」の優位性が際立つと考え、先行研究を行ってきた(平成21~22年度科学研究費補助金助成「ロシア語の動的事象の推移の記述にみられる言語的世界像」(課題番号21720133))。

2 . 研究の目的

(1) 本研究の目的は、文学作品とその翻訳という具体的な言語資料を用いて、各言語の意味的優勢素(「限界 limit」、「安定 stability」)が互いの言語に接触するとき、どのような処

理がなされるかという点を記述・分析し、互いの言語を背景に浮かび上がる意味的優勢素のテキスト上での振舞いを探ることが目的である。

事象の時間的推移の側面の「限界」と「安定」との大別は、象徴的に例えれば「点」と「線」に似る。客観的な言語外事実としての事象は時間の推移とともにどちらかの側面が前面に出る。例えば、動作の開始点や終了点は限界点として、継続中の動作や静態的な状態はある事象が一定時間は安定的に保持されるものとして捉えられる。仮説では、同一の状況を記述する際に、事象の限界的視座が優勢であるロシア語と事象の安定的視座が優勢である日本語では、状況の把握のし方、すなわち記述のし方がその言語に優勢的な視座に偏りを見せると考える。さらに、それは具体的な記述方法の差異に関わらず、優勢的視座へ偏るといふ点では共通すると考えられる。その具体的論拠を示すために、本研究では、文学作品とその翻訳を中心に経験的事実としての言語資料を収集・データベース化し、資料に現れる各言語の意味的優勢素（「限界」・「安定」）の言語相対的な処理の仕方を記述、データ分析のための指標を検討・提示し、実際にそれらを用いてデータ分析することによって、互いの言語を背景にして浮かび上がる意味的優勢素のテキスト上での振舞いを明らかにすることを目的とする。

(2) それによって、時間内で推移する動的事象の解釈および記述の際にロシア語にとって本質的に重要と考えられる意味的優勢素「限界」の、言語を貫くその体系性を異なる意味的優勢素「安定」を持つ日本語と対照させながら、構築することが研究全体の最終目標である。

3. 研究の方法

何を持って個別言語において意味的に優勢と判断するのかという点については、意味的優勢素の議論において挙げられている特徴を判断材料とする。それらは、他言語と比較した際の、a. 豊かな意味的、形式的差別化、b. 発話での高頻出度、c. 表現の低い意図性、d. 翻訳上の困難である。これらの特徴について、実際の言語活動に現れる意味的優勢素の実態を観察し記述する必要がある。本研究では言語作品としての「完成度」ならびに言語表現としての「自然さ」が最大限に求められる文学作品とその翻訳において、各言語の意味的優勢素の現れの実態を明らかにし、また、その翻訳における処理のし方を記述・分析する作業を行う。

まず、現代の文学作品とその翻訳からなるロシア語と日本語の並行テキストのデータベース化を行う。

次に、構築した並行テキストのコーパスを用い、動的な事象を記述するロシア語のテキス

トにおいて、「限界」の表現手段の形式的、意味的多様性を記述し、それがどのように翻訳に反映されているのかを検討する。他方では、日本語テキストの「安定」の表現手段について同様に検討する。

その後、両言語のテキスト上の振舞いについて総合的に検討し、各言語の優勢的な意味野、劣勢な意味野ならびに異なる意味的優勢素が接触する際の言語処理の実態をまとめる。

4. 研究成果

ロシア語と日本語の語りのテキスト（文学作品とその翻訳）を比較すると、同一場面に對して原作と翻訳の間で異なる記述の仕方を採用する場合があります。その中には各言語の意味的優勢素の影響下に、記述される状況が各言語で再解釈されるものがあると考えられる。対照言語間にどのような言語相対的処理のし方が見られるかを検討した結果、以下の傾向が観察された。

(1) 複合的事態の記述において、「連続する個別出来事の動態的推移」の記述を好むロシア語と「安定的状況（状態・過程）の静態的存在」という形で複合事態を記述する日本語の対立が見られる。日本語の場合、事態の複合性は従属節や付帯状況表現で担保されるが、主節の述語が安定的位相で表される。例1: Дом у Оленьки потемнел[PF], крыша заржавела[PF], сарай покопался[PF], и весь двор порос[PF] бурьяном и колючей крапивой. (А. Чехов) / オリガちゃんの家は黒ずみ、屋根は錆びつき、物置は傾き、中庭には一面にどげのあるイラクサやその他の背の高い雑草が生えていた。(沼野充義訳)

例2: 私をきつく抱きしめたまま目を閉じていた (山田詠美) / Он крепко стиснул[PF] меня и закрыл[PF] глаза. (Г.Дуткина 訳)

(2) 「動作主による目的志向動作」を中心に動詞述語で状況を記述するロシア語に、名詞述語を用いて状況を事実判断（「AはBだ」）として表現する日本語が対応するケースが見られる。このタイプは主に日本語原文とロシア語翻訳の間に観察され、ロシア語原文の日本語翻訳では現れにくい。

例3: 「堀口君、一緒に来てくれ」香嶋は席から立ち上った。堀口を連れて、香嶋が行ったのは、小田切グロサリー部長の席だった。(安土敏) / - Вот что, Хоригути, идемте-ка со мной, - сказал Кодзима, поднимаясь с кресла. Вместе с Хоригути он направился[PF] к начальнику сектора бакалейных товаров Одагири. (А. Долин 訳)

例4: 一九七〇年の夏にジェイズ・バーでジェイが撮ってくれた写真だ。僕は横を向いて煙草をふかし、鼠はカメラに向けて親指をつきだしていた (村上春樹) / СНИМОК ЭТОТ сделал[PF] в 1970 году старина Джей - два

приятеля за стойкой бара. Я сидел боком и попыхивал сигаретой, а Крыса улыбался камере, оттопыривая кверху большой палец. (Д. Коваленин 訳)

(3) 語りにおける時制の交替,特に過去の出来事を記述する際に現在形を用いるいわゆる「歴史的現在」の使用頻度が西欧諸語に比べると日本語で高いことはよく知られており,ロシア語との対照についても同様の傾向が指摘されている. 現在時点を挟み過去と未来に延びる現在時制は「限界」概念とは相容れない. ロシア語の場合,この用法は現在形を持つ不完了体動詞に限定される. したがって,継起的な諸出来事の記述に際して最も自然に用いられる完了体動詞—「限界」概念を内包する—を“捨てて”不完了体動詞を用いることはロシア語で意味的に優勢である. 「限界」の概念を形式的に取り扱う意図的な操作であり,そこに大きな文体的効果が生じる. それと対照的に,「限界」の概念が比較的弱い日本語においては,個別の出来事が動作の境界点によって厳密に時間軸上に位置づけられる程度が弱く,そのことが時制の交替に際しての話者の意図性を低くさせる面があると考えられる. ゆえに語りにおける時制交替はロシア語よりも日本語においてその優勢な振舞いが予測される. 『金閣寺』第一章を例に取ると,過去時制:現在時制の比率(% ; 小数点以下四捨五入)は日本語原文において64:30,ロシア語ではチハルチシビリ 84:14,ロマノワ 88:11 であり,日本語の方が現在時制を多用している. 日本語で現在時制への交替が起こるケースに特徴的なのは以下の場合である.

空間的・時間的に固定された場面の記述において,同時に進行または生起している現象が補足的情報として与えられる場合. とりわけ情景描写に顕著である. このタイプはロシア語で不完了体動詞過去形が登場することが多い.

例5: Шторы в кабинете были задвинуты, на столе горела[IPF-PST] лампа, ибо за окном уже начинало[IPF-PST] темнеть. (Б. Акунин) / 執務室のブラインドは閉められ,机の上でランプが燃えている[PRS]. 窓の外ではすでに日が暮れはじめている[PRS]. (沼野恭子 訳)

例6: 私は下駄をつっかけして駆け出した[PST]. 月のよい夜で,刈田のそこかしこに稲架が鮮明な影を落していた[PST]. 一むらの木立のかげに,黒い人影が集まって動いている[PRS]. 黒っぽい洋服を着た有為子が地面に坐っている[PRS]. その顔が大そう白い[PRS]. まわりには,四五人の憲兵と,西親である[PRS]. 憲兵の一人が,弁当包みのようなものを差出して,怒鳴っている[PRS]. 父親はあちこちへ顔を動かし,憲兵に詫言を言ったり,娘を責め立てたりしている[PRS]. 母親はうづくまって泣いている[PRS]. 私たちは田を一つ

隔てたこちらの畦から眺めていた[PST] (三島由紀夫) / Сунув ноги в гэта, я помчался [PF-PST] за ним. Ярко светила луна, легкие, прозрачные тени лежали[IPF-PST] на убранных рисовых полях. Под деревьями копошились[IPF-PST] темные фигуры. Уико, одетая в черное платье, сидела[IPF-PST] прямо на земле. Лицо ее выделялось[IPF-PST] в темноте белым пятном. Рядом стояли[IPF-PST] ее родители и несколько жандармов. Один из них сердито кричал[IPF-PST], размахивая каким-то узелком. Отец Уико беспомощно вертел [IPF-PST] головой, то прося прощения у жандармов, то обрушиваясь с упреками на дочь. Мать рыдала[IPF-PST], закрыв лицо руками. Мы наблюдали[IPF-PST] эту сцену с соседнего участка рисового поля. (Г. Чхартишвили 訳)

内的独白の場合.それが抽象的観念の思索の場合,ロシア語でも時制交替が起こり,現在形が頻出する.一方,日本語の内的独白には物語の中で重要な意味をもつ過去の具体的出来事が現在形(デフォルト)の使用によって時間的束縛から解放され,行為・現象そのものの存在に焦点が移動し,「現存事実」として語り手に再解釈される場合がある.そのような場合,ロシア語では完了体動詞過去形(「限界」マーカー)で示し,出来事そのものを確固たる「既存事実」として現在から切り離すことで,物語の区切り,新しい事態の到来(変化)を象徴的に表すと考えられる. 例7: ……事件といふものはわれわれの記憶の中から或る地點で失墜する[PRS]. 百五段の苔蒸した石段を昇ってゆく有篤子はまだ眼前にある[PRS]. 彼女は永久にその石段を昇ってゆくように思われる[PRS]. しかしそれから先の彼女は別人になってしまう[PRS] (三島由紀夫) / Каждое событие запечатлевается [IPF-PRS] нашей памятью лишь до определенной черты. Я так и вижу[IPF-PRS] перед собой, как Уико поднимается по ступеням замшелым ступеням. Подъем ее свершается[IPF-PRS] целую вечность. Но потом она опять переменялась, вновь стала[PF-PST] другим человеком. (Г. Чхартишвили 訳)

出来事に語り手の主観的解釈が加わる「ノダ文」が使われる場合.このように出来事に後付けされた語り手の主観的解釈に対し,ロシア語訳では何らかの表現上の工夫は見られない.

例8: 彼は後輩たちに挑まれて,裏の土俵へ,角力をしに行つたのである[PRS] (三島由紀夫) / А сам курсант отправился[PF-PST] на посыпанный песком ринг для сумо - кто-то из гимназистов предложил ему побороться. (Г. Чхартишвили 訳)

例 9 : И только когда прошло шесть месяцев, она сняла плерезы и стала[PF-PST] открывать на окнах ставни.(А. Чехов) / ところが六カ月が過ぎたとたん、彼女は喪章をはずし、窓の鎧戸を開けるようになったのだ[PRS]。(沼野充義訳)

ロシア語が「個別出来事の動態的推移」「動作主による目的志向動作」の記述を好む傾向、日本語が「安定的状況(状態・過程)の静態的存在」「状況の事実判断的把握」を好む傾向は、時制交替の記述においても、ロシア語と比較したときの相対的な現在時制の使用頻度の高さ、それが補足的な情景描写で多用されること、主観的評価を加えるノダ文の使用に反映されていると考える。動的事象の記述において、過去時制による客観的描写が優勢であるロシア語と、そこに主観的判断文が登場する日本語とでは、対照言語間に文法カテゴリー(テンス・アスペクト・モダリティ)のヒエラルキーの相違があることが窺われるが、それについては今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

Yuriko Kaneko, Elena V. Petrukhina, Aspectual classes of verbs: universal and idioethnic features (Russian and Japanese), *Japanese Slavic and East European Studies*, Vol.34, 査読有, 2014, 73-94 (in press).

Yuriko Kaneko, Aspect-Tense alternation in narrative texts of Russian and Japanese, Morgan Nilsson and Nadezjda Zorikhina-Nilsson (eds.) *The semantic scope of slavic aspect. Fourth Conference of the International Commission on Aspectology of the International Committee of Slavists. Abstracts*, University of Gothenburg, 査読有, 2013, pp.80-82.

Канэко Юрико, Выражение субъективной оценки общефактическим употреблением НСВ в русском языке и его отражение в японских переводах, *欧米言語文化論集*. 岩手大学人文社会科学部国際文化課程欧米言語文化コース, 査読無, 2012, 87-104

[学会発表](計 5件)

金子百合子, 時制の交替についての露日対照研究, 日本ロシア文学会東北支部 2013年度研究発表会, 2013.6.21, 東北大学(仙台)

Yuriko Kaneko, Aspect-Tense alternation in narrative texts of Russian and Japanese, The semantic scope of slavic aspect. IV Conference of the International Commission on Aspectology of the International Committee of Slavists, 2013.06.13, イェーテボリ大学(スウェーデン)

Канэко Юрико, Как определить «моментальные глаголы»? – Сопоставительный анализ русских и японских глаголов, II Международный научный симпозиум «Славянские языки и культуры в современном мире», 2012.03.22, Москву大学(ロシア)

金子百合子, 語りのテキストにおける動詞アスペクトの優勢素の機能: ロシア語と日本語との比較(発表はロシア語), スラヴ研究センター・国際スラヴィスト会議スラヴ語文法構造研究部会共催国際学術会議「スラヴ諸語における文法化と語彙化」, 2011.11.11, 北海道大学スラヴ研究センター(札幌)

Канэко Юрико, «Нестандартные» видовые формы японского языка и субъективно-оценочное восприятие действия: на материале переводов русских художественных текстов, III Конференция Комиссии по Аспектологии Международного Комитета Славистов «Глагольный вид: грамматическое значение и контекст», 2011.10.01, Падуа大学(イタリア)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 百合子 (KANEKO Yuriko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号: 80527135